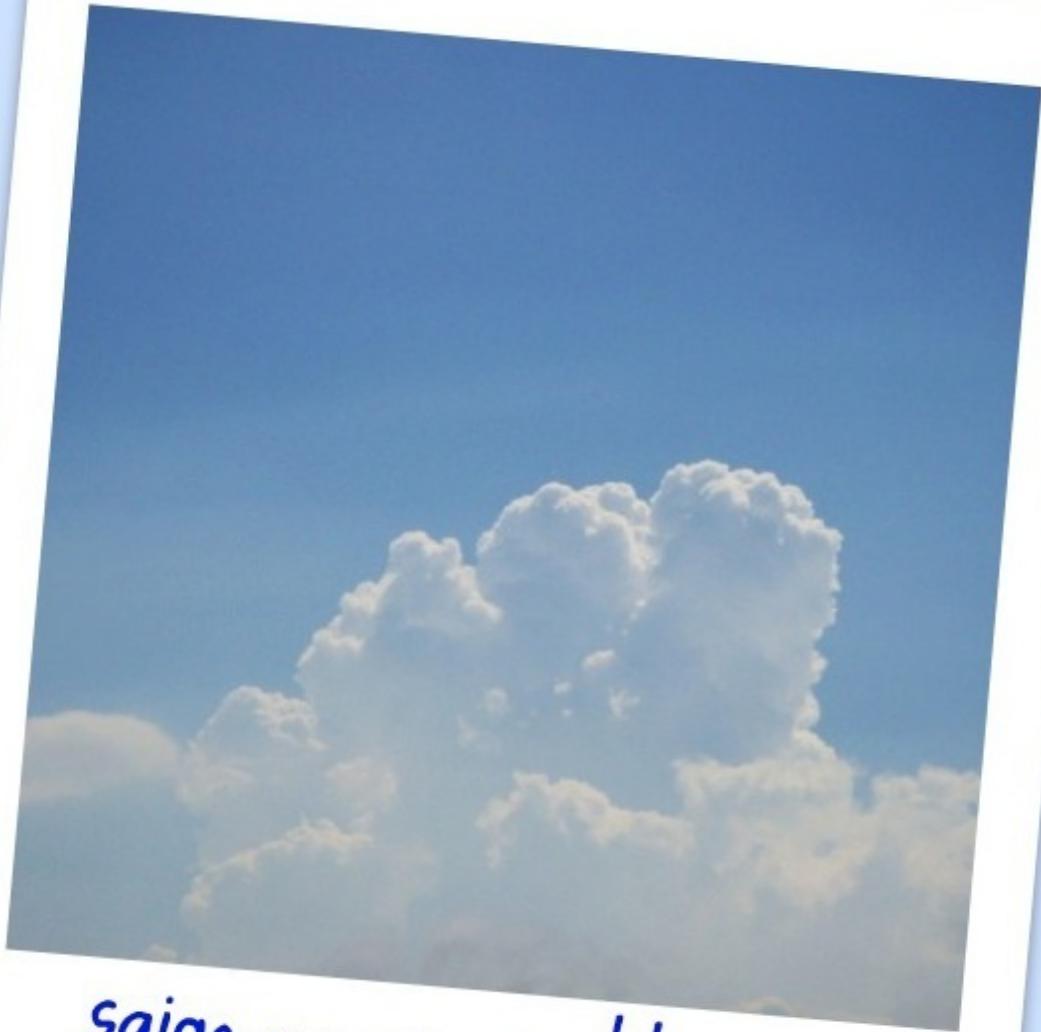
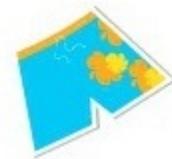


最後の未来日記



saigo no mirai nikki



mikatuki98

「とうとう昨日は日誌の更新が出来なかったな」

日付が変わってからパソコンで色々とチェックしていた時ハッと気が付いた。

「あっそうだ！」

今日2018年8月8日は俺の誕生日だということ。

「おめでとう」

「ありがとう」

まずは自分が祝ってあげようか.....

多分、誰も公言しなければ祝ってはくれないだろうという、内情は寂しい発想だ。

実際は昨日の昼間、明日は俺の誕生日だと気が付いていた。

「この暑さの中、おふくろは大きなお腹を抱え俺を産んでくれたんだなあ〜」

今までにない感傷に浸っていた。

ウン十年前のホントは全くない記憶を辿ろうと回想する。

俺は人生の途中の、ある年齢から先のビジョンが浮かばなかった。

「きっと俺の寿命はその年齢なんだろうな.....」

だからと言って悲壮な思いに駆られることもなかったが、ただ漠然とそう思っていた。

ところが結局その年齢をあっさりクリア。

あっさりと感じたのも、劇的な事件だの一大イベントだの、俺の魂を揺るがせる程の出来事も無かったせいだろう。

今思えば過去世において、単にその年齢で人生が終わったことがあったのだろう。

今また新たな寿命年齢が俺の脳裏を過るが、あまり考えないようにしないと。

「人は生きの限りを生き尽くすことが大事。耐えがたきに耐え、忍び難きに忍んで.....」

などど大袈裟に言うとは昭和の戦時中のようなのだが、生きてると予想外のことがやはり起るもんだ。

そして前つ前つに知らぬが花だともつくづく思う。

善くも悪くも前もって分かっていたら面白みが無くなるに違いないだろう。

俺はパソコンの画面に向かって打ったこの文章を2018年の8月9日の午前零時1分の予約投稿をしておくことにした。

「あと8年か..... その日俺が生きていようがいまいが、ブログが閉鎖さえされなければ更新させるだろうからな.....」

そう思った瞬間、8年という歳月が妙に長く感じられた。

今この時代の危機感が、俺の動物的感覚に迫ってきているのかもしれない。

そんな風に思考が迷走しながらも、なるようにしかならないことを俺の魂は知っている。

「これでどうだ!? カッコよくまとまっただろ?」

俺はもうコレを最後に、日誌なんて書かないことにした。 了